

# 「桃太郎力持ち」の事

野 村 純 一

本 IV には、当該場面の三丁裏、四丁表の絵柄に向けて、次のような「註」が施されている。

標題の文言は、草双紙『板桃太郎昔語』の一節に拠った。そこには次のようにある。

桃太郎力持ち。

(桃太郎)「こればかりに小石が何の重たいものだ。若い衆。  
見さしつたか。受け取り手はないか。」

「てんとあきれ果てた。この餓鬼はたいていな事じやない。  
つがない 手にや負へない」

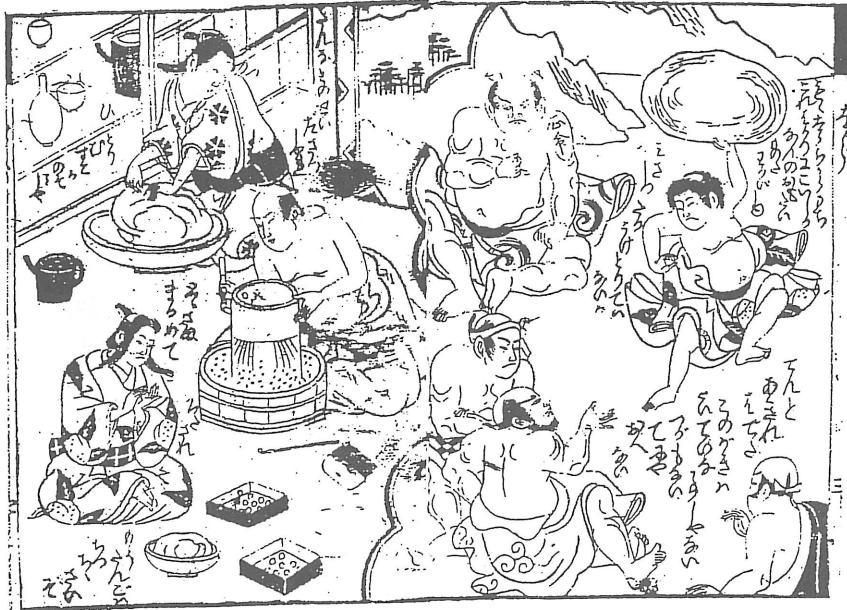
雲形郭線で分けられた二つの場面は、ともに民俗色豊かである。力比べの場面は、「力なしの大仏」(貞享二年「西鶴諸国はなし」) 黒本・青本「清盛一代記」「為朝一代記」などに見られ、後の二本では、幼少の頃に重い物を持ち上げる形で力が誇示されている。

黄表紙「新風桃太郎手柄嘶」(鳥居清経画)には、本書とよく似た図柄で桃太郎が力を示している図がある。

しかし、ここにいう「桃太郎力持ち」の図は、何も草双紙に限るわけではない。その風は絵巻物の類いからも一層強調されて見出されるのが叶えられる。たとえば高畠谷の「桃太郎」がそうである。一九九四年六月、東武美術館での「浮世絵の子どもたち」で瞥見した。その際の図録「浮世絵の子どもたち」「絵巻」の項には、これが六齣紹介されている。全容については「絵巻全一巻 十六図 29×1360cm」。天明頃」と記されている。ところが嵩谷の婿養子嵩溪にも本で大きな岩を高く共を前にして、諸肌脱いだ桃太郎は、左手一本で大きな岩を高く差し上げて、力の程を誇示していた。正面奥の男の左肩には「心(正)命」の祈請彫りが認められる。『江戸の絵

資料は鈴木重三・木村八重子編『近世子どもの絵本集 江戸篇』、ならびに小池正胤・叢の会編『初期草双紙集成 江戸の絵本 IV』を用いた。

ある。この跋文には「右一巻應需而畫 文化十一年申戌九月」とあ



る。全一巻 十四図 305×2110㍉。ちなみに、これにもとづいて、同館刊行の図録『描かれた美の世界』（一九九四年六月）の「解説」には次のようにある。

嵩渓がこの桃太郎絵巻を制作依頼によって描いたということがあるが、また絵解き風に描かれたこの絵巻は、大家の男子の健やかな成長を祈つて実際絵解きに用いられたものと思われる。

いま嵩谷、嵩渓の図柄を細部にわたつて比較検討する暇はない。

しかし、基本的に後者が前者の轍を踏んでいるのはまず間違いない。ただ、場面を共有する場合でも、たとえば山中にあって桃太郎が大きな月ノ輪熊を投げ飛ばす情景にしても、後者には主人公が担つていたとみられる柴を置き捨てにしてあるなど、添景に筆が加えられていることが多い。しかるに一方、鬼ヶ島での場面を見較べるに、嵩谷の桃太郎は傍らの大木を力任せに根こそぎにして、それを鬼共に振り翳し、相手を威圧しているのに嵩渓の絵にはこれがない。後刻、具体的に触れるが「桃太郎力持ち」のモチーフには、実は主人公の桃太郎が山中にあって大木を引き抜くというのが欠かせない場面であった。それからすると嵩谷の桃太郎は「桃太郎力持ち」の伝承世界に忠実であった、と考えられる。

「桃太郎力持ち」の図柄に関しては、補つてまだある。桃太郎のコレクター、小久保桃江氏の元に断簡だが同じ向きの絵巻が一本ある。幼少時の桃太郎は怪力無双、遊び仲間は疎か、周囲の大人も脅かすほどの存在であった。『桃太郎絵巻』はいずれも恰好のテーマにそれを採り上げている。嵩渓の絵では、日頃の遊び仲間に向けて



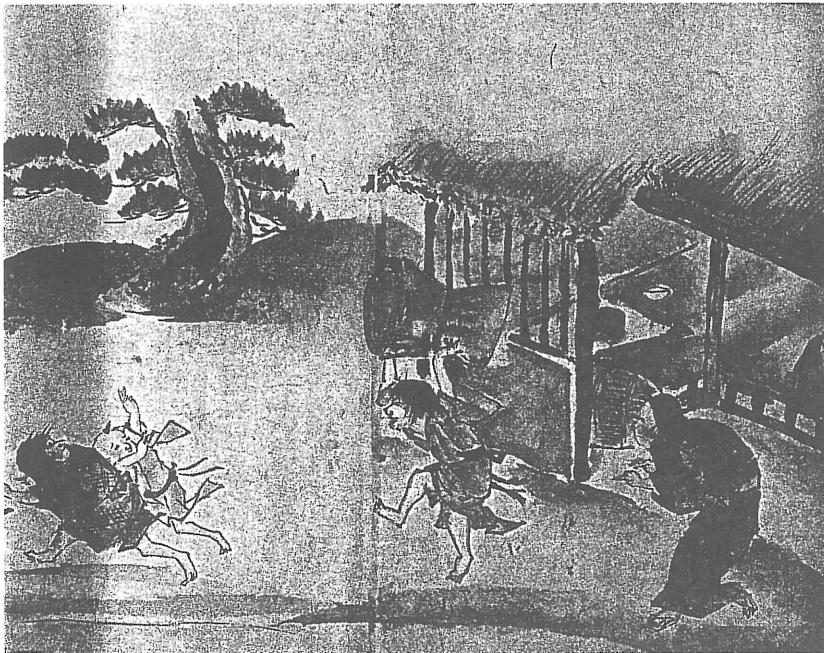
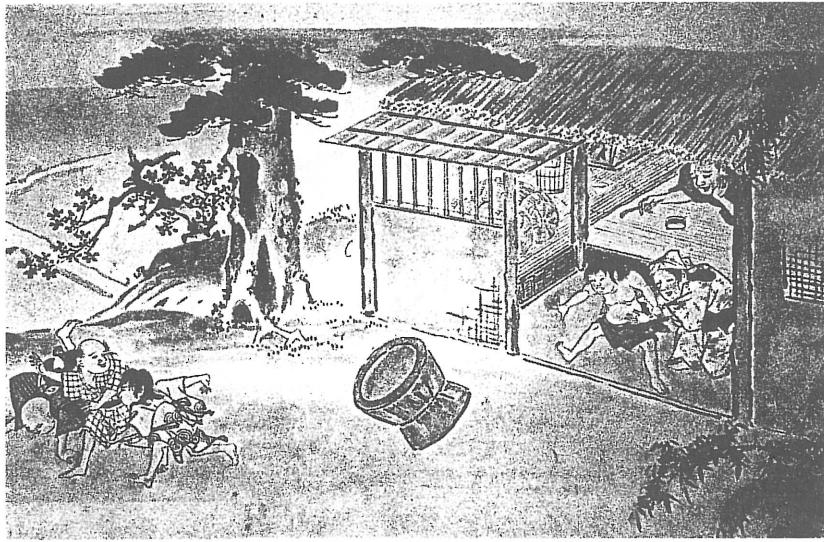
大きな臼を投げ付けている。姫は慌てて後ろから桃太郎を制止している。三人の友達は仰天して逃げ去ろうとしている。この場面、小久保本は臼を頭上に持ち上げたところで筆を留めていた。また、前出、岩を抱え上げて大人たちを相手に力較べをしているのも同じい。位置を異にこそすれ、両者共に怠りなく山伏を描いているのは、この舞台設定が山の中であるのを強く印象付ける材料になつていよう。

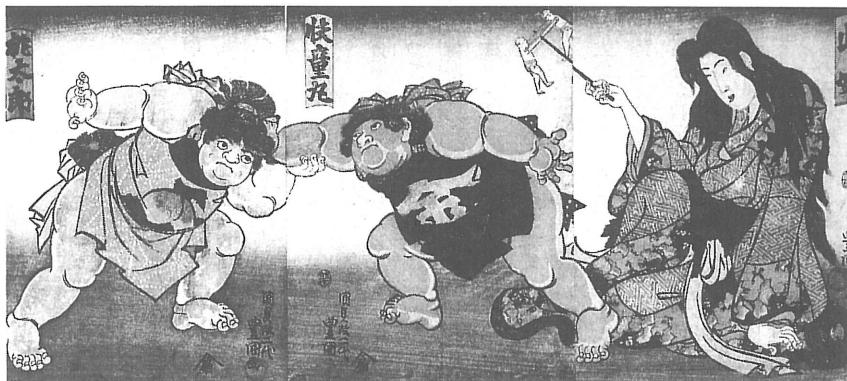
かくして、絵巻物に見た通り

「桃太郎力持ち」の場面設定は、どうやらこれが山里、もしくは深く山懐に在るのを追認し得た。

もつともこの間、早々に桃太郎論をものしたと認められる馬琴の『燕石雑志』は

その名を桃太郎と呼ぶ程に、  
その児忽ち大きくなりつゝ膂力  
人に優れて一郷に敵なし





と述べていた。また時代は下るもの、瑞鳥園斎守翁こと、加茂規清の『雛廻字計木』にも

不思議や産れし男の子、丈高く骨太にて、七ツ八ツ計りの子程ありて力強く逞しければ

とする記述がある。これらからして桃太郎には、いったいに幼童の頃から胆力著しく備わり、しかも少々手に余る腕力抜群の豪の者といった印象は抜き去り難くあったとしなければならぬまい。ただ、それにつけても、かの金太郎ならばともかくも、桃太郎がひとり深い山の中にあって、大きな月ノ輪熊を投げ飛ばしているという、金太郎もどきのこの情景と、その発想はそもそもがいたい何処から来たのであろうか。そういえば、国貞改二代豊国には大判三枚続きの「山姥 快童丸 桃太郎」の相撲の図があった。そこで桃太郎は山姥の見守る前で、快童丸と金太郎を相手にむんずと四つに渡り合っていた。桃太郎の腹掛けには大きな桃が一つ描かれ、一方、快童丸のそれにはお馴染みの丸金印がしっかりと描かれている。両者は相譲る気配もなく互角に力を競っている。紛れもなく、桃太郎は金太郎に同等の「力持ち」なのである。しかもさきの月ノ輪熊の一件を持ち出すまでもなく、またここでの図柄からしても、桃太郎と金太郎とは互いに相離れ難く一つモチーフを共有していた時期があったようと考えられる。のみならず、豊国のこの絵を見ているうちに私には、ここに出てくる山姥は、はたして金太郎のみの母親であったのだろうかという疑義が湧いてきた。ひょっとすると彼女は、桃太郎、金太郎の両者と共に母親役を与えられ、かつ務めていたのかかも知れない。しかして、もしもいま、如上のように桃太郎が山里にあってしばしば余人を驚かすほどの途方も無い力を發揮したのは、何を隠そう実はこの子も、かの金太郎同様に、その出生、出自に関しては直接山姥の血を享けていたとする伝承、いわば桃太郎はこれもまた山中の異童子であるとする態の、意外な事態の展開を予想するに至ると思われるからであった。

それがあつて、ここでは「桃太郎力持ち」、しかもこれが山中におけるただならぬ力者といった命題の元に、改めて昔話研究の立場か

ら少々アプローチしてみたいと思っている。

を施していた。

安藝郡矢野町出身の伊藤悟氏から聞き採つたもので、伊藤氏は五つ位の頃、父から度々聽いたものだと云はれ、尚、話の最初が却々調子よく語り出されたものだつたとも云はれた。

この事に關して、昔話の資料の中で最も早く、かつまた注目に価する例は儀貝勇編『安藝國昔話集』（一九三四年十月、後『全國昔話資料集成』5 一九七四年十月）所収「第一八番 桃太郎」であつた。次の如くである。

「桃太郎さん／＼、今日は山へ行きました」「山へ行かうにやア背負梯子がない」「おいこは父つあんのが有らうがい」「おいこはあつても杖がない」「杖も父つあんのが有らうがい」「杖はあつても鎌がない」「鎌も父つあんのが有らうがい」

桃太郎さんが皆と一緒に、山へ柴刈りに行つた。友達は荷を一生懸命に作つたが、桃太郎さんはおいこを枕にグーグー寝たびなよ。「桃太郎さん／＼、もう荷が出来たけんと販りませう」トギが桃太郎さんを見ると、大小便をして居つて、荷が出来とらん。桃太郎さんが起きて眼をこすり／＼あたりを見ると、トギの荷は出来とるが自分の荷が出来とらん。桃太郎さんは傍の大木に抱きついて力一杯引き抜いて、それを荷にして販つたげな。

桃太郎さんは、寝とつて大小便をたれたが、荷は作つたげな。

採集者の儀貝はそのとき、この話のあとに続けて次のような「註」

それはともかくも、研究史の上でいえば、儀貝の報じたこの一話に向けては、その後、四国の武田明が同様の例を示したあとで、そのことについても一言していた。『西讃岐昔話集』（一九四一年六月、後『全國昔話資料集成』9 一九七五年一月）所収「桃太郎」がそうである。次に示そう。

(話者) 三豊郡麻村 農 白川惣三郎)

桃から生れる奇瑞の誕生の條は無い。桃太郎は爺と婆と三人一緒に住んでゐる。或日の事桃太郎は近所の友達と山へ芝刈りに行く約束をした。二三日して友達が誘ひに来て「桃太郎さん／＼山へ芝刈りに行きませんか」と言ふと桃太郎は「今日は草鞋の作りかけしよるけん明日にして呉れ」と言ふ。翌日になつて友達が

「桃太郎さん／＼山へ芝刈りに行かんか」と言ふと「今日は草鞋のひきそを引つきよるけん明日にして呉れ」又翌日になつて友達が行くと「今日は草鞋の緒をたてよるけん明日にして呉れ」翌日になつて誘ひに行くと「今度はさあ行かうと連立つて二人で山へ登つた。友達は一生懸命に芝を刈るが桃太郎は一本の大木に先れて晝寝ばかりしてゐる。友達は一荷こしらへたので歸らうとすると桃太郎は凭れてゐた大木を抜いて家に還つて来る。家のおだれへたて掛けると木が餘りに大きいので家は崩れて仕舞ひ爺と婆は下敷きになつて死ぬ。桃太郎は爺と婆を助けようとして家中を探し歩いてみると大きな鹽があつた。それに乗つて川を下つて行くと海の眞中の島に流れ着いた。島では青鬼と赤鬼が相撲をとつてゐるので見てみると赤鬼が負けたので「赤鬼ウワハイ」と囁かれてると赤鬼は怒つて「赤い豆やるきん黙つとれ」と言つた。今度は青鬼が負けたので囁すと「青い豆やるきん黙つとれ」と言つた。今度は見てみると赤鬼と青鬼が一緒に轉んだので囁したてると桃太郎にうつてかゝつたので桃太郎は二匹の鬼を東にして海中へ投げ入れ鬼の住家の寶物を取つて家へ還る。

此の桃太郎は力太郎系の昔話が讀岐にも存在することを證據だるものであり「寝太郎」も同系の話であることを暗示するものである。尚安藝國昔話集の桃太郎は此話の破片でもあらうか。

右に付されたコメントは、昔話研究に携わつてきた武田明の知識にもとづいている。「此の桃太郎は力太郎系」云々の条は、その五年前に刊行をみた柳田國男・関敬吾編『昔話採集手帖』の分類を念頭に置いての発言かと思われる。ちなみに『採集手帖』には「一 桃太郎」「二 力太郎」「三 瓜姫」に始まつて「六 一寸法師」「七 隣の寝太郎」といった順序で配されていた。

こうした事情を踏まえて、武田がここで「桃太郎」を「力太郎系」といった判断の元に理解しようとしたのは、判る。ただし、併せて『寝太郎』も同系の話であることを暗示する」とは、いったい何を意味していたのであらうか。後『日本昔話名彙』(一九四八年三月)にもいうように、これはおそらくは磯貝の報じた例の文字鎖風問答体の場面、ならびにこの武田資料分の「今日は草鞋の作りかけ」「今日は草鞋のひきそを引つきよる」「今日は草鞋の緒をたてよる」とばかりに、傍からの誘いに対し話の主人公は一向に応じようとしない。何の彼の言つた挙句によく行動を起こし、それでいていつたんそうなると今度は周囲を仰天させるほどの途轍もない力を發揮するといった、そうした在りように向けていったのだろうと思われる。なお右「桃太郎」の当該部分は、当然「物くさ太郎」

と、あたらしの左衛門尉のぶよりとの

「地ちをつくりて過ぎよ」と有ければ、「持ち候はん」と申す。

「さらば取とらせん」とあり。「物くさく候程に、地もほしからず候」と申せば、「商あんをして過ぎよ」とあれば、「もとで候はず」と申す。「取らせん」と有ければ、「今さらなはぬこと、知らぬ事、なりがたく候」(『岩波大系本』)

とする応答の場面を喚起させるものであった。ただこの事は、一層踏み込んで解釈するに、ここに見る「桃太郎」と「物くさ太郎」との対比、対照は、それは単にここでの情況設定にのみ留まるわけではなかった。注意すべきはむしろこうした問答を通した上での積極的な人物造型、いうなればそこでのきわめて特徴的な人格の彫塑にこれが大きく手を籍していたと思われるからである。そしてこれなどはむしろすでに潜むする伝承上の作法のひとつではないかと理解するのだが、たとえばこれをして『物くさ太郎』は、その主人公を「さてはかかる曲者かな」と評し、加えてさらに「扱もく」是程の「たくらだは」とばかりに極め付けていた。「物くさ太郎」は「曲者」であり、かつ以ての外の「たくらだ」としたのである。したがって、それからするならば、ここに披露された中国、ならびに四国地方にみえる、それぞれの「桃太郎」たちは、それこそ並外れた「力持ち」であり、屈強の「曲者」であると共にまた、それは紛れもない「たくらだ」として塑像、造型されていたのは、まず間違いないところであった。

おそらくはそれがあつての判断であろうか。関敬吾もこの部分には早くから注目していた。『日本昔話集成』(一九五三年四月)『大成』(一九七八年五月)を通じて「一四〇 力太郎」の「註」の一節に「朝鮮に於ては大力者、鼻息の荒い者、山を崩す男、大小便をたれる男である云々」とするのがこれである。これからすればなるほど「力太郎」の原像は、いかにも粗野で大力、しかも著しく單純な

### 三

しかし、それにしても、である。あえて繰り返すようになるが、それにしても途方もない筋書にあるこの手の「桃太郎」は、いったい何處からやつてきたのであろうか。戸籍、来歴はいつに那辺にあつたのかということである。だいいち、考えてもみよう。当初はまるで天邪鬼のごとくにああいえ、こう、こういえ、ああいうの、すつたもんだの舉句、トギ仲間に促されて彼はようやく山に行くことになった。ところが仲間とは別に一人この男だけは「おいかを枕にグーグー寝たげなよ」であつたり、もしくは、「一本の大木に凭れて晝寝ばかりして」いたのである。それだけではない。他の者がいよいよ帰ろうとするのにこの「たくらだ」はなんと「大小便をして居つて、荷が出来とらん」といた体たらくであった。ただし、ここでの「大小便」はどうやらこの「桃太郎」話での不可欠、不退転の部分かとみて、語り手は重ねてそれを強調しているのが印象的であった。

男といったイメージにある。本質的にはそれでよいのかも知れない。しかして、ここに想起するに、たとえかの「百合若大臣」は「起

きて七日、寝て七日の人」「眠れば十七日も眠り続け、起きれば十七日も起き続けるという人」であったので、鬼と「七日七夜の目性くらべ」、すなわち「鬼と七日七夜にらめっこして勝つ」ことが出来た

といふように、これが英雄、豪傑としての卓越した属性、あるいは条件のひとつとして、数えられていたかとも見做し得る。したがつて、これからすればここにいう「大小便<sup>云々</sup>」の条は、そのまま反

転して直ちに「おいこを枕にグーグー寝たげな」、つまりこれらはいずれもそこでの主人公を「起きて七日、寝て七日の人」に比定する積極的な反証としての表現、いうなればそこでの主人公の尋常ならざる素姓を進んで裏書きするための装置の一種であったとも理解し得るのであつた。

況を知るために『井内谷』と『あめご話』から、その例を続けて示してみる。

とんとん昔があつたそな。

お爺とお婆とがあつたそな。二人が山へ木を取りに行たそな。ほいだら川上から桃が流れて来たそな。大けな桃じやつたので桃をさげて帰つて、

「こんな桃は見たことがない。」

と言うて二人で食べたそな。ほいだらしばらくして婆に赤ん坊が出来るようになったそな。この年してどうしたことかいと思うとるうちに大けな赤ん坊が生まれたと。桃太郎と言う名をつけ育てとつたが並の子供よりずつと大きゆうになるんじやと。よその子供が来て山へ木をおろしに行くんじやと。

「桃太郎さん山行かんでか。」

と言ふと、

「われは今日は櫻がないけん行かん。」

と言うそな。ほいでもまた翌日になつて来て、

「桃太郎さん、山行かんでか。」

と言ふと、

「われは今日は鎌がないけん行かん。」

と言うそな。ほいでまた翌日になつたら来て、

「桃太郎さん山行かんでか。」

と言ふと、

さて、個々の話に向けてのこの種の解釈はともかくも、こうしたいくつかの話題を抱え込んだ「桃太郎」は、その後も武田明を中心とし、続けて報告を見るようになつた。『候えばくばく』(日本昔話) 11 一九六五年七月 所収「桃太郎」、『井内谷昔話集』(日本昔話録) 9 一九七三年十月 所収「桃太郎」、そして細川頼重『あめご八の話』(一九七二年五月 後『東祖谷昔話集』) 10 一九七五年二月 所収「桃太郎さん」がそうである。ここではその後の状

「われは今日は繩がないけん行かん。」

と言ふそうな。ほいだらまたあくる日になつて来て、

「桃太郎さん、山行かんでか。」

と言ふと、

「ほいだら行くわ。」

と言うて一緒に山へ行たそうな。

よその子はみんな木を取るのに、桃太郎は山で昼寝ばっかし

とするそな。日が暮れてもういぬる時分になつて、桃太郎はみん

ながよう動かせんよな大けな木を一人で切つて来て、

「ようけ出来たけにもう帰らんでか。」

と言ふんじやそな。みんなはびっくりして桃太郎と一緒に帰つ

たそな。桃太郎は爺と婆の家に帰つて来て、

「爺よ、婆よ、今もんたぞ。」

と言ふたんで、爺と婆が出て見ると、大けな木をじょうずに（た

くさん）切つとのでおぶけたそな。

ほいで、

「これだけ力があつたら鬼が島へでも鬼征伐に行けるわ。」

と言ふと、桃太郎は、

「そらか、よしよし。」

と言ふて、お爺とお婆に弁当を作つてもろて鬼が島へ鬼征伐に行たそな。

とんとむかしもあつたそな。むかし、爺さんと婆さんが桃太

郎さんと一緒に住んで、その日その日を何ともなしに、気楽にすぎはないしょつたそな。

天氣の悪い雨の降る日は、爺さんと婆さんは、おちらしを碾（つぶす）たり、稗（稗）の粉を碾いて団子も作つたりするけんど、天氣の良え日は、爺さんは山へ柴刈りに行くし、婆さんは川へ洗濯（わせぎ）に行くのが仕事だったそな。桃太郎さんは、日に日に我のしたいことびやあして遊びよつたげな。

今日も爺さんと婆さんは仕事に出かけようとしたが、我んく（我が家）を出しなに爺さんは、桃太郎さんに言ひきかせをしたそな。

「お前も大きくなつたんじやきにのうや、こまい子供のようになにち毎日、遊んでばっかりおらんと、ちつたあ我んぐの足すになることせにやあいかんぞよ。」

と言ふて山へ行つたそな。そして、夕方になると、爺さんと婆さんは仕事がすんだきに、我んぐへ戻んてきて、囲炉裏（ゆるいろ）にぬくと火焚（ひびき）いて当たりもつて茶あ飲みよつたそな。そのうちに桃太郎さんも戻んできた。

桃太郎さんは、家のたすになることしようと思つて山へ出かけたが、木切つたこたあなし、柴（さわら）まるけたこたあなし、仕事するすべ知らんきに、立てりよる株（くね）になるよな木を根元から引こ抜いて、扫一（かた）で戻んて來た。桃太郎さんは、我んぐへ戻んて来ると、

「おじいさん、今戻んて來た」

と言ふて、扫一できた木をずしりと家にたてかけた。そしたら、

バリバリバリと家が潰れてしもうて、爺さんはめしそうけに首突っ込んで、婆さんは雑炊鍋に首突っ込んで死んでしもうたと。

どちらも「桃太郎力持ち」の特性がよく出ている。殊に前者における例の「文字鎖風問答体の場面」はその典型かと思われる。また、後者の「木を根元から引こ抜いて」の条は、さきに指摘した如く、これもこの手の話の特徴が顕在化しているといえよう。

さて一方、早く磯貝勇によつて報ぜられた中国地方からは、岡山県を中心に引き続いてこの種の話が集中的に紹介されるようになつた。岡山民話の会『なんと昔があつたげな』上巻（一九六四年十一月）所収「桃太郎」をはじめ、柴口成浩・幸子『三室むかしこっぺり』（一九六九年七月）、稻田浩二・立石憲利『奥備中の昔話』（『昔話研究資料叢書』8）（一九七三年二月）、稻田浩二・立石憲利『中国山地の昔話』（一九七四年九月）所収の例がいずれもそうである。のみならず、同様の例は田中瑩一・酒井董美『鼻ざき甚兵衛—出雲の昔話』（一九七四年六月）にも報告されて、話の分布は山陰の地にも及んでいるのが確認された。前後して私共もこの間、瀬戸内の島々に昔話を聴き歩いたが、その際、広島県豊田郡大崎町の菅原キサ姫（一九〇九年七月二日生）からは「桃の子太郎」の題のもとに同種の話を採録した。資料は『採訪記録 ひろしまの民話』第二集（一九八二年四月）に収載した。話の中でキサ姫が「大きな松の根元をちょっと掘つて、その掘つたところへズーッとおしつこをかけましてね、そしたら、土が柔らかくなりましてね、そしたら、その

根っこに抱きついて』（同書P.61）という具合に、その部分をきちんと説いていたのが思い出される。ちなみに『なんと昔があつたげな』所収例も、ここどころは「大きな木のもとへ行って小便をして、それを引き抜いて、かついでもどつた』（同書P.23）と述べている。もちろん磯貝報告の古い資料に比較して、迫力に欠けるのは最早万能を得ぬが、これを言うのがやはり本来の語り口ではなかつたのだろうか。

ただいすれにしても、ひとつひとつの場合にこだわっていたのは話は進まない。それがため大局的な面に話題を移すが、この手の「桃太郎」話に向けて、その後も一層有益な資料発掘を続けたのは、岡山は総社市在住の立石憲利であった。立石は近時も『しんどうの民話』岡山県神郷町の採訪記録——』（一九九五年三月）に「桃太郎」ならびに「ももも太郎」を報告して注意を集めた。次に同書から安達愛さん（一九一〇年三月二十五日生）の語る神郷町油野の「桃太郎」を示そう。

昔々、お爺さんとお婆さんとおつて、お爺さんは山え木うこり、行つて、お婆さんは川え洗濯を行つて、へえで、桃が流れてきた。桃の中から桃太郎が生まれて、

「大きゅうなつたけえ、山へ木こりい行けえ」 言うたら。

「きょうはにかお（荷を負う紐）がなえけえ（ないから）よう行

かん」 いうて、

「きょうはにかおをなわにやいけん」

「ほんなら、あしたりやあ（明日には）にかおをのうて（綱つて）行けえよ」言やあ、

「あゅうはわらじがない」

その先あ、

「背な当てがなえけえ行かん」いうてなあ。

次、次、いうて、せえから山え行つて、木うしゆう（小やく）切りや面倒ないうて、元気にやああるし、根から（根元から）があーーと大きな木う抜いて、引こすつて戻つて、

「えいへ降ろそとか」いうてなあ、

「そのかどへ（外庭へ）降ろせえ」言やあ、

「かどへ降ろしゃかとがめげる」

「ほんなら木小屋え降ろせえ」言やあ、

「木小屋やなんかいは（などには）入りやあせん。木小屋がめげる」ふうと。

立石はなお『民話集 三室峠一同町採訪記録2—』（一九九六年三月）にも藤原シゲ代（一九一〇年四月十八日生）の「桃太郎」を紹介した後、今日現在、中国地方一帯に伝承されるこの種の「桃太郎」話を総括して、次のような「註」を施している。

「桃太郎」の変型の中でも代表的なもので、「寝太郎型」とか「山行ぎ型」という命名がされているものである。桃太郎は横着者で、山に木こりにさそわれると、履き物・にかお・背な当てを作ることなど、いろいろな仕事を口実に行かない。山に行つても働かないが、最後に大力を發揮する——という内容。鬼退治の部分

が欠落しているものが多い。

「通観」では笑い話「ももく太郎」（1122）に分類し、「桃太郎」とは区別している。鬼退治の部分のない話は、笑い話化の傾向が見られるが、異常誕生、鬼退治の部分など「桃太郎」との基本的な違いはなく、「桃太郎」の一つの型と考えるべきだろう。

伝承地域は県内では阿哲郡、新見市が中心で、高梁川流域で採録されている。全国的にみても高梁川流域を南北に伸ばした鳥取、島根、広島、香川、高知などの地域に限定されている。

説くところ的確で過不足はほとんどない。称してこの手の「桃太郎」話を「寝太郎型」、あるいは「山行ぎ型」として捉えるとしている。なるほど内容的には「たくらだ」の「寝太郎」の「山行ぎ」ということで、間違はない。ただし、それはあくまでも話の実態に即しての分類であって、次にそれがいったい何を意味しているのかとなると、これはこれでまたまったく別の問題になつてくる。

## 五

もうともそらはいうものの、思えばそりでの内容は、独立した一篇の話としてはひとり想像を絶した筋書きにあって、至極厄介な仕事であった。おそらくは、それがあつてのことであろうか。柳田・関の『昔話採集手帖』は、磯貝の報告例を傍に描いて、佐々木喜善の『紫波郡昔話』所収「桃ノ子太郎」を採択したのは、当時としては判るような気がする。しかし、その後の武田明の報告をみると

至つて、柳田自身もこれらをまったく無視していいたわけでは決してない。『日本昔話名彙』編纂の際には「桃太郎」の項で一言していった。研究史の上では、これを受けてその後、稻田浩二は『奥備中の昔話』の「解説」に「口承文芸としての特質——『桃太郎』の伝承と話型とをめぐって——」と設けて、次のように記した。

柳田國男氏は『日本昔話名彙』の「桃太郎」広島（安藝國昔話集）の話について、「変例なり、破片か。やや物草太郎に近し。」と注している。この点について、「変例なり。」「やや物草太郎に近し。」の短評については異論はないが、「破片か。」という評価についてはあらためて検討する段階にあると思う。氏の注はこの広島例一話を材料として与えられたことを考慮しなくてはならないが、それについても果たして「破片」といえるであろうか。

ここに稻田のいう「果たして『破片』といえるであろうか」の指摘は見逃がせない。何故ならこれを単なる「破片」と見做すか、それともこの事例を独立して意味のある基本的な一話として認めるかは、途話題になる。更にいえば、その後の情況からしてこれはすでに「変例」ならずして、中国・四国地方における典型的な「桃太郎」そのものであったのである。さすれば当然、この種の話は正面に据え直して考えてみなければなるまい。手続き上、まずはその主人公を俎上にのぼらせることから試みたい。

そこで、改めてこの男の様子を質すに、何を描いても話の主人公が発端から頗著に主張していたのは、彼は最初から周囲の仲間とはまったく異なる在りよう、いわば異相の存在であるとするその一点にあつた。客観的には一切身元保証の無い境遇である。それでも拘らず彼は一向に憶する風もなく、むしろそれを際立たせていました。たとえば、トギ仲間が折角懇切に誘つてくれたにも拘らず、「山へ行かうにやア背負梯子がない」「おいこはあつても杖ががない」「杖はあつても鎌がない」とばかりに一方的に言い立てて諾おうとしない。その都度抗うかのように自己都合をいつて動じなかつた。察するに潜在して他に何か特別の理由があつたのであらうが、これをして、もしも容易に俗に添わない異衆の人と評したなら、少々深読みの買ひ被りに過ぎようか。しかし、そのあとでいったん山に行つたとなると、一転して俄に凄まじいエネルギーを、しかも爆発的に發揮するようになる。周囲を圧倒するのは並大抵の有様ではない。いうなれば、彼はおもむろに山に入る、つまりは久方振りに山懷に抱かれる機を得て、これまでに蓄えてきた力を一気に発散するようになる。「たくらだ」の「桃太郎」にはここに及んで、遂に決定的な転換が訪れたとする仕組みにあつた。信濃から都に上つた「物くさ太郎」を彷彿させる展開である。柳田國男が「やや物草太郎に近し」と評したのは、これであろう。ただしこの場合一連の主人公たちは、あくまでも山に赴いたとするところに意味があつた筈で、事情を勘案すればここでの「桃太郎」の出自、素姓は元来が山にあつたのを教唆しているのではなかろうか。山を原郷としていた

のである。そしてもしもそうであるのなら、翻って里方に在つての彼は紛れもなく異客そのものであつたとしなければなるまい。

かくして、反転してひとたびこの筋書きを辿れば、話の主人公が仲間からの懲罰にはおいそれとは応ぜず、それどころか重ねて拒絶条件を述べ立てたのは、実はそうしたひと続きの所業によつて彼自身の裡なるエネルギーを徐々に高め、かつ充足させるための物理的時間を稼いでいたのだと理解するのが叶えられよう。目的は

あつたのである。すなわち、かの文字鎖風に反芻する問答体の在りようは、何を描いてもまず山に還るべきエネルギー補填のための方途であったのである。結局はそれがあつてこそ、いつたん山に入るや忽ちに「グーグー」と寝、次いで話題の「大小便」を放つのもあり得たに違いない。これを要するに、この手の所為はいずれも英雄、豪傑の条件、あるいはその属性として強調して常に憚ることのない証しに繋がるものであつた。聖なる問題児としての姿容であつたと捉え得る。

加えてその際、もう一条指摘したい部分がある。ここで主人公たちは山に赴くに際しては一様に「背負梯子がない」「杖がない」「鎌がない」、あるいは「にかおがなえ」「わらじがない」「背な当てがなえ」といった具合に、それぞれ三回これを言い立てる。これはだいたいに三度の繰り返しを要求する、いわば昔話世界における三の原理にもとづく、その手のパターンを映しているのか、それとも別条、他に特別意味するものがあるのか、どうかとする発議である。具体的にはこの部分、主人公は山に入るにさきがけて、三種類の用

具、もしくは品物の準備に始終こだわるが、これにはやはりそれ相当の理由が潜在するよう思われるならない。それというのも、ここにみる三点セットは、元来が話の世界に認められる呪宝、呪具の類ではないかと考えられるからである。次いで、さらにこの推察を一步深めれば、ここにみえる三点セットの原質は、どうやら「杖」「蓑」「笠」が本来の在りようではなかつたのかと思われるからにほかならない。

仮りにいま、右三点の原型を「杖」「蓑」「笠」に置き換えてみよう。はたしてどうであろうか。繰返すようになるが、かの「桃太郎」たちが用立てたのは「杖」であり、「草鞋」であり、そしてまた「背負梯子」であった。この三つは現今の中では、もちろん、当面する山仕事への携行品といった風に語られている。語り手たちもおそらくはそう思つてゐるに違いない。しかし、そうであろうか。たしかにこれらの品は山行きへの携帯備品であると同時に、むしろそれは一方で、遠い旅に出立するのを目的とした品々であるとも解けはしないだろうか。したがつて、もしもそのように移行して考えるなら、これ本来の原質は「杖」、あるいは「蓑」「笠」であつても決して不思議はなかつた筈である。さればここに話の主人公が、というのはずなわち、ここによつやくこれらを必要不可欠の付帯条件とする者の姿が、忽然と浮上してくるような思いが私にはする。それこそは、言わざと知れた遠来の、しかも異形の者の旅姿。要は稀人、つまりは“客人神”としての存在そのものであつた。これをして、山からの異影、あるいは異行の人の出立いりだちとでも称したらよい

であろうか。いずれにしても、ひとえに山を原郷とするところの、すこぶる尋常ならざる人の在りようがこれであつた。

いたんこのようにしてみれば、大方、中國四国之地を領有していたこの「たくらだ」の「桃太郎」の心體事、すなわち「桃太郎力持ち」話の素姓と原郷は、かの金太郎と同じく、意想外にも人里離れた山中に在り、そして彼もまた山中の異童子、もしくはそれの宴姿ではなかつたのか、とするのがとりあえずはここでの結びの言である。

なお、資料の提示に際して格段の配慮に与つた高松市歴史資料館、ならびにくもん出版の中城正堯氏に篤くお礼申し上げる。